

第36回 日本毒性病理学会総会及び学術集会

<研究発表のご案内>

●ポスター発表 2月13日(木) 16:55~17:45 ポスター・展示会場 1号館1階131・132教室

演題番号 : P-10 ○松島 圭太 (株式会社ボゾリサーチセンター 病理部)

演題名 : NOD/Shi-scld IL-2R γ null (NOG)マウスにみられた脳病変に関する病理組織学検討

概要 :

雄NOGマウスの大脳に形成異常疑う病変がみられたので、病理組織学的に検索した。その結果、尾状核から大脳皮質にわたり細胞質辺縁の好塩基性領域及び核周囲の好酸性領域を有する細胞質と、核小体明瞭な大型核を有する神経細胞様細胞、小膠細胞及び肥大星状膠細胞のびまん性増加並びに髄鞘の形成不全が認められた。増加した神経細胞に異型性や有糸分裂像はみられず、周囲組織への圧排もみられないことから、腫瘍性病変の可能性は低く、大脳の形成異常の可能性が推察された。

●ポスター発表 2月13日(木) 16:55~17:45 ポスター・展示会場 1号館1階131・132教室

演題番号 : P-67 ○藤原 史織 (株式会社ボゾリサーチセンター 病理部)

演題名 : F344ラットにおける脈管進襲を伴う膵島細胞癌

概要 :

ラットにおける膵島細胞癌は限局性の浸潤や転移を示すといわれているが、その殆どは被膜形成とその破壊による偽浸潤である。今回F344ラットにおいて膵島細胞腫瘍細胞が管状構造壁内及び内腔へ進襲した症例に遭遇したが管状構造物が膵管と脈管の区別が困難だったため、詳細を検索した。その結果、壁構成細胞の過半数は抗 α SMA抗体陽性を示し、その細胞の間を縫うようにマッソントリクローム染色陽性の膠原線維が多数認められた。内腔を内張りしている細胞は不明瞭であり、エラスチカワンギーソン染色を実施したが弾性板はみられなかった。しかし管状構造物は既存の脈管と類似しているため、脈管である可能性が高いと考えられる。

●ポスター発表 2月14日(金) 15:45~16:45 ポスター・展示会場 1号館1階131・132教室

演題番号 : P-64 ○青木 萌子 (株式会社ボゾリサーチセンター 病理部)

演題名 : Cr1j:CD-1(ICR)マウスの卵巣における性索間質腫瘍の発現状況とその特徴

概要 :

卵巣腫瘍の発現状況は動物種及び系統によって異なり、中でも性索間質腫瘍は免疫染色による鑑別が困難な場合がある。本研究では、長期試験におけるマウスとラットの卵巣腫瘍及び性索間質腫瘍の発現状況について調査し、ICRマウスの性索間質腫瘍が形態的特徴のみで鑑別が可能か検討した。卵巣腫瘍及び性索間質腫瘍の発現頻度は、ラットに比べマウスで高く、特にICRマウスで高かった。また、ICRマウスの性索間質腫瘍は、形態的に鑑別が可能と考えられた。

(以上筆頭発表者のみ掲載)